

真鍋賢二氏（元大平幹事長秘書官）に聞く

外交に関心が深かった

―聞き手・福島正光



大平総理のアメリカ、メキシコ、カナダ3カ国「最後の旅」に随行して、カーター大統領と握手する真鍋参院議員（ホワイトハウスの南前庭で・1980年5月1日）

大平先生の秘書になつたきつかけ

——真鍋さんが以前書かれた本『私が見た大平正芳』によりますと、大平さんのおつき合いは、昭和三三年（一九五八年）の選挙のお手伝いから始まった。大平さんは、三三年までに二七年、二八年、三〇年と三回、選挙をしているんですね。しかし二七年は二位ですが、あとの二回は三位なんです。三三年から一位になった。それは、一体どういふわけですか。官房長官の時の選挙では、得票数がグーッと伸びる、これは分かるんですけどもね。

真鍋 大平先生は、最初のうちは地味で、お話も立て板に水を流すような流暢な話術ではなかつたわけですから、理解が得られるためには少し時間が必要だったんじゃないだろうかと思ひます。一回目、二回目は、「無名の大平正芳さん」ということで、識る人ぞ知るだけでも、まだ一般的には知られていなかった。政治家としては海のものとも山のものとも分からなかつた、と。特に二回目の選挙は、一回目から一年もたつていない時のいわゆる「パカヤロー解散」の選挙であつただけに、一回目で精力を使い果たして、体力、資金力もショートしてしまつておりましたから、ご本人に言わせると自分でも不安で落ちたと思つて、開票日に布団を被つて寝ておつたという状態だつたようです。しかし私は、ある意味では神様の采配というか、そういうものが人生の中にあると思ふんですね。神様から、「この人は落としてはならない人物だ」というような裁定がなされておつたのじゃないだろうか、と。そして、僅かの差ながらも当選した、という素晴らしい、奇蹟的なものがあつたんじゃないか、と思ふんですよ。

——人柄が知られるようになるのは、三回目あたりからですか。

真鍋 私が仕えたころの大平先生は、まさに、徐々にその人柄や能力が選挙民の方々に知られてきたころじゃなからうかと思えます。それで昭和三四年、衆議院の文教委員長になったのです。私は政務次官になるのが先ではないだろうかと思っていました。三回目の選挙の時に地元の選挙参謀の皆様が、池田勇人先生のところへ押しかけて、「大平先生を政務次官にして下さい」と言ったら、池田先生に一喝されましてね、「政務次官なんてやるべきではない。政務次官などやらなくても、俺が天下をとれば、すぐに然るべき地位につけるのだ」というようなことを言って、政務次官の人事から大平先生を外してしまつたと聞きました。

で、昭和三四年に衆議院は大平先生に、参議院は宮澤喜一先生にやってもらうんだ、ということ、池田先生が二人を文教委員長にした。この時には、もはや大臣近しいということだったようです。池田先生は、いつでも「俺が天下を取れば」ということを口癖のように言われておつたわけです。そういうことがあつて、ようやくにして選挙民や一般の人たちも「大平代議士が只者ではない」ということを認識し始めたんじゃないでしょうか。私は秘書になつてから後援者の皆様に、「大平正芳という人間は素晴らしい御神輿だ。みんな一緒になつて担いでくれんか」と言い、とくに若い人達に担ぎ手になつてほしいと訴えました。もう年老つた人たちは、いくら掛け声は大きくても担ぐ能力は衰えてくるわけですから、若い人たちに担いでくれと、お願いをしたわけです。そういうことが、大平先生がトップに躍り出る大きな要素になつたと、私は思っております。

——大平さんと娘婿の森田一代議士との縁も、真鍋さんが関わっておられるとか……。

真鍋 森田一先生のご縁も、私が取り次いだわけです。大平先生の支持者で、森田先生のお母さんの森田なすえさんという方が、私の叔母と女学校時代、同じ寄宿舎で生活を共にした同級生であった縁で、森田先生のお母さんと知り合い、また大平先生のファンであったため、大平芳子さんのご縁談が持ち上がったとき、「うちの息子が大蔵省におけるけれども、もしそれでよければ……」ということ、私が取り次いだわけです。まあ、これは人生のめぐり合いですから、どこにご縁があるやら分からないし、その結果なんていうのは年をとっての評価になるわけです。その当時は良かれと思って、皆さん、縁組みをされたわけですから、決まったところがベターであり、めぐり合いである、というふうに理解してもらわないといかんのじゃないかと思えますね。

大平先生に見込まれた理由

——大平さんが、大学を出て就職まで決まっていた真鍋さんを、これはと見込んで相当強引に秘書にしちゃったというのは、どういうわけなのでしょうが。

真鍋 私は当時は分からなかったのですが、今になって、こうだったんじゃないかなという気がしてまいりました。それは、先人をあれこれ言うわけではないのですけれども、秘書をやっておられた岩倉淳一さんという方に対する選挙民の評価が、いろいろあったからじゃないかと思えますね。それで、誰か代るべき人を探しておった。そこで、一、二年のうちに育てていかねばならんということで、私を認めてくれたんじゃないだろうかと思えます。私だってまだどんな人間やら判らないものですが、果たして岩倉さんの後の秘書として使いものになるかどうか、まず使ってみようということ、

私を採用してくれたんじゃないだろうかと思えます。私は、のちのちになって、そういう感じがするわけなんです。私は秘書になってからは、週末や祭日はほとんど選挙区へ帰ってお手伝いをさせていただきました。この頃から、選挙の勢いが随分違ってきました。みんな御神輿を担ごうと、次々と呼び込んで行ったら、「ワシも担ぐ、ワシも担ぐ」というような、そんな若い人たちの意気込みが、選挙の勢いになって現れてきたんじゃないでしょうか。

——真鍋さんの力と新しい力が上手くマッチして、盛り上がってきたのですね。

真鍋 私力なんていうのは、徴々たるものですがね、あの当時は。

——「芳友会」などをつくられたのは、後の外務大臣時代（昭和三九年）ですね。

真鍋 そうです。昭和三八年の外務大臣時代の選挙で、思いがけずに二位になったのです。その反省の上に立って、後援会を若返えらせなければならぬと思い、芳友会と雄心会を創り、組織を立て直したのです。

——それでは、最近の若い人には、当時の政治状況は分かりにくいと思うのですけれども、大平さんは、最初は自由党ですね。それから、保守合同で三〇年に自由民主党ができる、自由民主党もできたけれども、将来どうなるか分からん、また分裂してしまうかもしれない、というような空気も党内にあったと思います。大平さんの書かれた若い頃のものを見ていますと、自分は党の政策なんてものにはあまり関心がなかったと。自分の、何て言いますか、実感というものを、経済政策だったらこういう発展を何とかしないと、そういうロジックのほうが大事で、そればかり訴えていたと。選挙に当たっても、党の政策なんていうものはほとんど頭の中になかった、と書いておられますね。しか

し、その当時の大平さんの選挙公報を見ると、鳩山一郎党首の民主党が唱えた憲法改正と再軍備を訴えておられる。それはやはり、当時の状況がそうさせたものでしょうか。

憲法改正・再軍備を訴えたわけ

真鍋 それは、やっぱり自民党の方針で、憲法調査会ができて戦後の憲法がどういう形ででき上がったかということについての説明もしなければならぬし、これからの日本の憲法がどうあるべきかということについての問題にも取り組まなければならないということで、まだ戦後憲法を見直しして改革して行こうという意欲は、強かったんじゃないでしょうか……。

——ただ、数年後、とくに安保改定後になると、選挙公報の調子がガラリと変っちゃったんですね。しかし、大平さんの気持ちのどこか底に、憲法はいずれ改正しなければならぬのだ、というような思いがあったのかなあと思うのです。私は、大平さんが親しかつた高松高商の同窓生の方から、そういうふうは大平さんが言っていたということを聞いたことがあるんです。吉田茂さん（首相）も再軍備に反対したけど、実際には親しいところに行くとな憲法を改正して再軍備しなければならぬ、と言ったというような話があります。当時の政治家には、そういうダブル・トラッキングといいますが、複雑な思いがあったように思います……。

真鍋 あの憲法調査会というのは、憲法の見直しということ、これは党是として選挙公約の中に謳われておりましたですね。ですから、あくまでも、この憲法問題について日本ナイズされておるかどうかということ、絶えず問い正していかなきゃならぬという、大きな命題であった、と私は思い

ますね。それから、日本の衣として相応しいかどうかということは、いつも問い正しておかなきゃならんじゃないかということで、与えられた憲法というような気持が強かったものですから。また戦後、その憲法というものが日本に定着できるものかどうかという疑問をもった頃だったから、それは当然、どの候補者も、そういう姿で取り組んで、アメリカから与えられた憲法を、そのまま鵜呑みにしてやっ行ってこうなんていう政治家は、おそろくないなかつたんじゃないだろうかと思えます。だから、吉田さんの時代に発足した警察予備隊的なものを、将来は充実させて、日本の治安と世界の平和に貢献できるものにしていかなきゃならんという意識が、あつたんじゃないだろうかと。それで、再軍備問題についても、考えて行こうということが、一つの選挙公約になつたんじゃないかと。で、そういうものが選挙公約になつて当然だと、私も当時、思つておりましたですね。

—— だいぶ前ですが、大平さんの甥の加地一憲さんから当時の選挙のやり方を聞いた記憶がありません。要するにかなり荒っぽい選挙で、相手候補のポスターをはがして廻つたこともあつたとか。

荒っぽい選挙と選挙民へのサービス

真鍋 選挙は戦争ですからね。負けてしまつたら、どうにもならないということで、それは熾烈だったですよ。ご馳走合戦なんていうのは、もう平気の平左でね。皆さんやつておられたですね。当時は、まだ物の不足した時代でしたから、少しでも物をいただければとか、ご馳走にありつければということでした。同一選挙区の相手候補が、折り詰めを二合壇でもてなしたと聞けば、こちらも負けとやる。選挙公約で政策を訴えるよりも、折り詰めを出して、一杯やれば人気上がる、という選挙

でしたから、当時は苦勞いたしました。私なんかも、選挙区の人が特別列車で集団で上京して、東京観光をやるとか靖国神社に詣るとかいうときには、朝の早い時間に品川駅に着くのを迎えに行く。私は、大平先生の代理を務めて品川駅で朝まで待つて、その人たちを迎えたこともありました。それから旅館に着きますと、必ずタオルや何かお土産を持っていく。当時は車がありませんでしたから、自転車で夜な夜な大きな籠に大きな荷物を入れて、旅館を訪ねては、ご挨拶をさせていただいて、サービスに努めたわけです。当時は政治家は、物心両面にわたつての選挙民へのサービス合戦に徹しておつた時代でした。これが当時の選挙戦じゃなかったかと思ひます。

——大平さんも、そのことは『素顔の代議士』に書いておられますね。

真鍋 当時は議員会館に車がなくてね。車に乗つた国会議員は数えるほどでしたよ。大平先生は、昭和三年の時でも車を持ち合わせていなくて、大平夫人のお父様の三木証券の車を合乗りさせていただいて、共同活用しておりました。

——大平さんは官房長官の時から、外交について非常に関心が高かつたようですが……。

外交感覚は代議士になる前から

真鍋 身近な内政問題だけではなく、眼を外に向けるという外交の必要性をいち早く唱えたのが、政治家・大平正芳先生じゃなかったかと思つたのですね。大蔵省の役人時代に、中国の張家口に赴任しておつたものですから、その当時の外国の生活体験があるだけに、周辺諸国と仲良くしなければならぬ。特に日米戦争を戦つて負けたわけでありますから、その両国間の修正をして行かなければなら

ない。そういう外交の大切さということ、深く認識しておったのではないかと思えますね。ですから、いち早く日米関係に取り組まなければいかん、日中関係の友好にも力を入れなければいけない、お世話になった国ぐにはそれなりのお返しをしなければならぬ、諸外国との外交交渉をよりスムーズにやっつけていかなければならぬ、という気持ちになったんじゃないかと思えます。と同時に日本は貧乏しておりましたから、世界銀行（世銀）から借金を随分しておりましたですね。その返済を毎年しておった。大蔵省の役人時代にそういう問題に取り組んでおったということが、大平先生が外交に熱心にならざるを得ないという感覚を養った。だから外交感覚は、代議士になる前から備っておったんじゃないだろうかと思えます。

——GHQ（連合軍総司令部）との関係もありますね。

真鍋 それも大いにあります。これも吉田（茂）さんからもそうだし、大平先生が四谷の大蔵省の庁舎からGHQに通ったり、いろんな交渉に当たられたわけでありますから、そういうものも、大きく関与したのでしょう。これは推測の域を出ませんけれどね。そういうわけで、私は、政治家としての大平先生は外交問題に何としても取り組んで行かなければならぬ、外国の信用を失くしてはならないと考えておられたと思えます。

日中韓三力国環境大臣会合の開催

——今度出版された真鍋先生の『優優飛翔』の出版記念パーティーで、日中にしては日韓にしても、人と人との出会いを大切にしてきたことが、日中韓三力国環境大臣会合の早期開催をもたらしたと言

実 われましたが、その辺を少しお話いただきたいと思います。

就 真鍋 私は小淵内閣の環境庁長官に就任したときに、環境の保全にはまず自分の目で実情を把握する
華 ことが大事だと考えて、「現場主義大臣」になろうと心に誓ったのです。そして、大平先生の秘書
去 時代から旧知の、金鐘泌さんと唐家璇さんという両国の指導者に働きかけて、その快諾を得て、平成
一一年（一九九九年）一月一三日に、日中韓三カ国環境大臣会合をウエスティン朝鮮ホテルで開催す
ることに成功したのです。日本がこの会合のイニシアティブを取り、私は会合の冒頭「アジアを代表
する日中韓の三カ国は、それぞれ先進国、中進国、開発途上国といった世界の縮図でもある。この三
カ国が東アジア地域で直面する環境問題はもとより、国際社会が直面している環境問題への対処のた
め、異なる立場や主張の溝を埋める努力を行い、協力を進めることの、意義はまことに大きい。……
こうした取組みを世界に発信していこうではないか」と発言したのです。

—— たしかに、日本は環境問題ではアジアのリーダーにならなければいけない国ですね。

真鍋 日本は高度成長時代に大量生産・大量消費・大量廃棄ということで、公害の垂れ流しで一番
の公害国であつたわけですが、それをいろんな技術を駆使して一つ一つ克服して行って、今や環境問
題では世界のリーダー国の一つになつたわけなのです。しかし、まだアジアの諸国を一つにまとめて、
世界の環境問題のリーダー国として、力を発揮する段階まではきていないものですから、私はベス
ト・プラクティス（優良事例）ということで、日本が韓国や中国に呼びかけて、東アジアがまず結束
して範を示すことによって、世界に環境問題の重要性を訴えることができると思つたわけです。

—— 中国に対する働きかけとしては、平成一〇年一〇月二二―二三日の北京での温家宝副総理、唐

家璇外交部長、解振華国家環境保護總局長との会談がありますね。

真鍋 私は率直な意見交換をしましたがお三人ともそれぞれ立場も異なり、個性的なパーソナリティの持ち主であるために、微妙なニュアンスの違いはありました。特に印象に残ったのは、温副總理は文字どおり濃厚な雰囲気を持ち併せた政治家で、発言の内容は前向きでしたが具体的なコメントでは言葉をとられない対応をしたこと、解總局長は低公害車・低燃費車にたいへんな関心を示されたことでした。唐部長は、私が大平外務大臣の政務秘書として一九七四年一月に訪中したときに初面識をもつてから二五年間の付き合いであり、駐日公使から外交部部長助理に栄転される際には送別会を主催したほどの親しい間柄です。ですから外交部長室で二人きりで二〇分余り旧交を温め、環境問題について腹藏ない意見の交換を行いました。中国では外交部が地球温暖化の国際交渉の主導権を握っているのです、私は今後の展開を大いに期待しています。

——唐家璇さんは、日中航空協定の時には毛沢東主席の秘書をされていたのではないですか。その時の思い出を何か……。

日中航空協定交渉と唐家秘書

真鍋 大平先生は一九七三年の大晦日に、中国から「実務協議を一月四日から北京で開催したい」という連絡を受けて、一月二日、香港のホテルに着いた時には、悪性の風邪に加えて腎臓結石の激痛に襲われて、眠れない一夜を明かし、三日午後遅く、北京に到着しました。到着後、直ちに姫鷗飛外相と会談、翌四日に周恩来首相と二回会談をしましたが、双方の主張が真つ向から対立して、長時間

実 にわたったがなかなかまとまらなかった。こんなにまとまらないのだったら、日本の主張だけ述べて
就 帰ろうやと言って、諦めて帰ろうとしたのです。その夜、大平先生が寢室に入ったのは午前五時頃で、
華 私もうとつとした頃、午前六時頃でしょうかドアがノックされたのです。ドアの前には毛沢東主席の
去 秘書の唐家璇さんと周恩来首相の秘書の徐敦信さんが立っていて、「毛主席が大平外相にお会いした
いと言っています。起床次第お迎えに上がりたい」と言ったのです。それを私が大臣に伝えましたら

「それじゃ軽い食事をして、すぐ行こう」ということになり、私がこのことで小川（平四郎）大使に
連絡をとろうとしたら、二人は「このことは、大平大臣と秘書のあなたお二人だけのことにして、あ
とは一切、内緒にしてほしい」と重ねて言われたのです。そして大平先生一人を会談の場所へ連れて
行ったのでした。それから二時間近く、先生の帰りを待っていた私は、先生が何処へ連れて行かれた
のか分からないので、居ても立ってもいられない気持ちでした。いま、考えると、あの二人は外交官
としてルールを逸脱して、外交マナーを無視したわけですが、当時の私は外交のマナーを十分に知り
ませんので、心配していただけですね。あとで撮影した写真を見ると、毛沢東主席、周恩来首相、そ
れに四人組の一人の王洪文副主席と通訳の王効賢女史がいますね。中南海の一室ですね。

——唐家璇さんは、大平さんについて、何か語ったりしたことがありますか。

真鍋 あの人は毛主席とか膠承志中日友好協会会長とかの秘書をしていましたから、大平先生が日
中国交正常化のために、それだけ力を尽くしたかということをよく知っており、高い評価をしている
ことはたしかですが、特別に私にコメントはしていません。しかし、徐敦信さんとともに当時を知っ
ている生辞引き的存在でしょうね。なお、徐敦信さんは、日本語が非常に上手な方で、その後、駐日

大使をへて現在は全人代常務委員会の副委員長をやっています。

——韓国への働きかけについては、真鍋さんの金大中大統領と金鐘泌首相との人間関係が大きくものをいったようですね。

金大中・金鐘泌氏との深い人間関係

真鍋 田中内閣の大平外相時代に金大中事件が起こりますね。大平先生が特別にサインして日本への立ち寄りを認めたために、金大中さんがKCIA（韓国中央情報部）に拉致されてしまい、そのことに大平先生が非常に責任を感じておられたといわれておりますね。私は宇都宮（徳馬）さんの秘書の村上さんに誘われて、金大中さんと銀座で一緒に飲食したという記憶はあるのですが、当時の詳しいことはよく分かりません。ただ、そういうことがあったために、金大中さんは私が韓国を訪問すると、二人きりで話し合う機会をつくって下さるのです。三力国環境大臣会合を一時中断して、解振華総局長とともに青瓦台に金大統領を表敬訪問した時に、日中韓三国環境大臣会合を将来的には北東アジア六カ国にまで拡大させようではないか、という心強い言葉をいただきました。

——金鐘泌首相とは、日韓基本条約の締結を受けての、大平・金鐘泌会談がありますね。真鍋さんは、秘書として、それをどう見ておられましたか。

真鍋 私は詳しいことは知りませんが、無償三億、有償二億の五億ドルの資金供与は、当時としてはたいへんな金額であり、大平先生が誰にも相談するわけにもいかないということで、苦悩の末に決断したわけですね。韓国がこれから復興して行くためには、どうしても資金協力をお願いしたいと真

剣に迫る金鐘泌情報部長の熱意に応えて、外務大臣の一存では決着のつかない金額であったにもかかわらず、大平先牛が裁断を下したわけですね。後日、池田勇人総理から大目玉を頂戴しましたね。私と金鐘泌さんのお付き合いは、この時から始まって、以後、不遇の時代における香川県を舞台にした農業関係者の技術研修への協力などして、次第に人間関係を深めて行きました。なお、崔在旭長官が、金鐘泌総理の元秘書であり、ツーカーの人間関係にあったことも、三力国環境大臣会合の開催に大きく寄与しました。

——金鐘泌さんは、大平さんをどう思っておられましたか。

真鍋 金鐘泌さんに会えば、必ずといってよいくらい、「大平さんの地元です」という香川県出身の政財界人に日韓基本条約の折に大平先生と苦勞した話を、言うのです。大平先生を最大の功勞者であると評価し、あの決断を多としてしているわけですね。こういう人間関係の積み重ねの上に、日中韓三力国環境大臣会合という花が開いたわけですよ。こうした外交の成果を考えると、やはり私は、大平先生の余慶を享けていると痛感いたしますね。

——そうですね。外交では人がパイプになる以外にないですからね。

真鍋 イデオロギーなんて二の次ですよ。いまイデオロギーの境界がなくなりつつあるわけですね。人と人とのつながりが問題の解決に働くし、国家間の懸案の処理に役立つのではないかと思えます。外に向かつて進んでいかなきゃ嘘ですよ。このグローバル時代にですね、内政ばかりやっていても、もう事の処理はできないのじゃないかという感じがしますね。

——話は変わりますが、大平さんと田中角栄さんの盟友関係についてどう思いますか。

田中角栄総理と大平先生の盟友関係

真鍋 大平先生は、煩わしい問題を処理するよりも、外交問題とかビジョンのある政策本位の政治家として、歩んで行こうとされていた。「些事がまづ勿れ」という姿勢が、大平先生を大きく大きく活躍さす力になったんじゃないだろうか。些事のほうは私が淡々と処理していたわけです。しかし、大平先生は度量のある、大きい人だったというふうに私は理解しています。だから、事務所の机は全部、私が独占して仕事をやっていました。大平先生は事務所にこないし、私に任すというのだから、私はそれでいいと思っていました。

それで、大平先生と田中角栄さんの付き合いもその類いでした。いろいろ議論があってもね、田中さんが一人で喋ってね、大平先生はほとんど黙っていた。角栄さんが一時間喋っても、大平先生は五分ぐらいしか喋らず、田中さんに「お前の言うことは、こうだな」と言つと、田中さんは「そうだ、そうだ、その通りだ」などと言って、納得していた。田中さんを喋らせなったらストレスが発散できない性格の人だった。しかし、お二人は非常に呼吸が合っていました。

ある時、あのロッキード問題の時に、大平先生が電話で「本当にもらっていないんだな」と聞いた。「絶対、もらっていない」という返事が、その場で返ってきた。そうしたら、大平先生が「判った」と、言った。判ったと言ったら、角栄さんがどんなに窮地に陥るうが、「俺の盟友だ」と言ってはばからなかった。それが、大平先生の素晴らしいところであった、と思うわけです。

中国の人は、「水を飲む時には井戸を掘った人の苦勞を忘れるな」という古事にならって、「田中先

先生には日中国交回復のためにたいへんな決断をしていただいた。先生にどんなことがあっても礼儀を失ってはならん」と、言っているし、香川県にきたら必ず大平先生のお墓にお参りに行ってくれます。華われわれまでが、いまだにその恩恵を受けているわけです。これは本当にありがたいことだと思っております。

——最後に、真鍋さんにとっては大平先生はどういう存在だったと思いますか。

真鍋 一九年間、秘書生活をしたのと、その後、参議院議員になってから三年間ということで、二年にわたって大平先生と一緒に過ごさせていただきました。それは私の全財産であり、その出会いの素晴らしさということ、いまも感謝せずにはおられません。大平先生の下でいろいろの教訓を受けたことが、私の人生そのものです。大平先生抜きに私を語ることはできません。

(平成二十二年一月八日、真鍋賢二議員会館事務所取材)

真鍋賢二(まなべ・けんじ) 一九三五年、香川県に生まる。岐阜大学農学部卒業後、大平正芳代議士の秘書となり、大平通産大臣秘書官など一九年間、大平代議士の政治活動を支える。七七年、参議院議員に初当選し大平内閣樹立のために尽力、二期一二年間、務めたあと、九六年に三選を果たし現在は三期目。この間、通産政務次官、参議院文教委員長、参議院自民党政策審議会長、環境庁長官等を歴任し、現在は参議院金融・経済活性化特別委員会委員長。著書に『私の見た大平正芳』『未来に橋を架ける』、最新刊に『優優飛翔』がある。